[四章　　　 アビリティ・コントロール](file:///C:\Users\%E9%A2%9C%E5%BB%BA%E5%BF%A0\Documents\%E5%B0%8F%E8%AF%B4\%E5%A4%84%E5%88%91%E5%B0%91%E5%A5%B3%E6%97%A5%E6%96%87%E5%8E%9F%E7%89%88\%E5%87%A6%E5%88%91%E5%B0%91%E5%A5%B3%E3%81%AE%E7%94%9F%E3%81%8D%E3%82%8B%E9%81%93%EF%BC%88%E3%83%90%E3%83%BC%E3%82%B8%E3%83%B3%E3%83%AD%E3%83%BC%E3%83%89%EF%BC%89%EF%BC%97\text\part0029.html#toc-008)

#　まだ、覚えている。

尚且，还记得。

#　歩きながら自分の記憶を整理していたマヤは、ほっと息を吐く。

摩耶一边走路一边整理着记忆，突然叹了口气。

#　騎士たちに追われて、サハラをび出す前に純粋概念を何度か行使した。その時の代償でなにを忘れたのか、順繰りに昔の記憶を引っ張りだしながら整理をしていたのだ。

从被骑士们追杀到召唤撒赫菈之前自己使用了多少次纯粹概念？摩耶整理着脑海中的记忆，找出哪些记忆作为代价被遗忘，顺带着回顾往昔。

#　純粋概念を振るう異世界人のへの道は、必ずしも一定ではない。個人差があるし、なにより失った記憶がどれだけその人の人格にわっているかで純粋概念の浸食率は変わる。

对于使用纯粹概念的异世界人来说，变成人灾的速度并不固定。这种事情不但存在着个体差异，而且纯粹概念的侵蚀速度也会随着遗忘的记忆对这个人的人格的影响产生对应变化。

#　親、兄弟、友人に知人。

父母、兄弟姐妹、朋友以及知己。

#　自分にとって大切な人のことを忘れれば忘れるほど、精神の変容は早まる。自分という記憶の連続性がなくなった時点で一気に加速していく。自分の核になる部分の記憶が消失して自意識が揺らぐと、性格が変質してをうつ勢いで人格が崩れ、純粋概念に飲み込まれてしまう。

遗忘的人物对自己越是重要，就会越早迎来精神的变化。在“自己”这份记忆变得支离破碎的时候，人灾化的进度会一下子加速。乃至于最核心的记忆都被遗忘，自我意识也产生动摇。人格就会像雪崩一样从细小的性格变化开始迅速崩塌，最后被纯粹概念吞噬。

#　だからマヤは、まだ大丈夫だった。

但摩耶目前还没有什么问题。

#　大切な思い出は、きちんと残っている。まだ自分が自分でいられることを確認したマヤは、顔を上げて周囲の光景を見る。

最重要的回忆，还牢牢地留在心里。摩耶确认了自己尚且还能维持着自我之后，抬头看向周围。

#　幸運なことに、マヤたちは雪が本格化する前に町に着くことができた。

#　街道の検問に発見されて大部隊が編制されかけた時は年貢の納め時かと覚悟したのだが、なにやら途中で明らかに捜索の手がんだ。本部がどうだの、町でどうしたのと伝令が騒いでいた辺り、もしかしたらマヤたちに構っていられないほどの大事件が起きたのかもしれない。

#「ふう。大変な逃走劇だったわね」

#　当のサハラはといえば、自分の苦労をアピールするために、わざとらしくの汗をうしぐさをする。

#「騎士たちの手から逃れること、二回。包囲された町から脱出して、街道の検問も突破。雪が本格化する前に、無事に次の町に到着した。我ながら大手柄ね。褒めてくれてもいいのよ？　具体的に言えば、ほら、この小指にあるヤモリの指輪のいを解いてくれても ──」

#「ここ……」

#　自分は頑張ったぞとドヤ顔して厚かましい要求をするサハラの横で、マヤは茫然としていた。

#　彼女にとって、いまいる場所は見覚えのある町だった。

#「戻ってるんだけど」

#「……」

#　その一言に事情を察したサハラは「あっ」みたいな顔をしてから気まずそうに視線をそらした。マヤはぐいぐいとサハラの修道服のを引っ張る。

#「ねえ、サハラ。戻ってるわ。ここ、メノウたちと別れた街よ？　どういうことなの？　あたしたち、進んでいたんじゃなかったかしら。ねえ？　ねえ、サハラ！」

#「人生っていうのは、三歩進んで二歩下がるものなのよ」

#「言い訳はそれだけでいいのね……！」

#「いふぁいいふぁい」

#　つま先立ちしたマヤが、両手でぎりぎりとサハラのをつねる。身長が低いせいで下への引っ張る力も加わって、結構な痛みのお仕置きになっていた。

#「どうするのッ。これじゃ、間に合わないわ！　徒歩じゃ、どうやっても待ち合わせの場所に着けないもの！」

#「これを機に、おとなしくグリザリカに帰るっていうのは？」

#「ヤよ！」

#　やる気ゼロのサハラに、烈火のごとく拒否を放つ。

#　ハクアに指定された待ち合わせまで、あと二日。『遺跡街』までは、徒歩だとどう頑張ったところで五日以上はかかる。その上、雪まで降っているのだ。雪中装備もなく町の外に出れば遭難待ったなしである。

#　もはやマヤが約束の場所にたどり着くのは絶望的だ。サハラはしたり顔で続ける。

#「むしろ、よかったってポジティブに考えるといい。マヤがなにをしたいか知らないけど、絶対にされているから」

#「よ、く、も！　下僕の分際で、ご主人さまに生意気なこと言ってくれるわね！」

#「ご主人様というのなら、まずは私のことを養ってほしい。話はそれから」

#「あたしみたいな小さな子に養われたいの!?　サハラは人としてのプライドがないの!?」

#「別に、楽させてくれるなら誰でも……ていうか、マヤ。目的地どころか、この町で寝泊まりできるかも怪しいわ」

#　うぐっ、とマヤは言葉をに詰まらせる。

#『』経由で用意されていた隠れ家は壊されているし、宿泊所は言わずもがな、手配書が回っているだろう。このまま無警戒に顔を出して街中を歩いていれば通報の一択だ。街中でもこの天候で野ざらしに一夜過ごせば、明日には立派な凍死体が出来上がっているだろう。今夜の命がピンチだ。

#「あ、あの」

#　さてどうするかと悩んでいると、声を掛けられた。

#　視線を向けた先にいたのは、マヤよりは年上だが、まだ幼い年頃の少女だ。号外か新聞の切れはしか、彼女の手にはメノウとサハラの姿が載っている紙が握られていた。

#　まずい。二人の顔に緊張が走る。

#　この少女は明らかにサハラのことを『』総督だと認識している。善良なならば通報をためらわないだろう。

#「ま、待ってください！　『』さんには、助けてもらったんですっ！」

#　マヤの許可も取らずにとっさにを返したサハラを、少女が慌てた声で呼び止める。

#「お、恩返しのために、お二人をかくまわせてくださいっ」

#　ツナギの上に防寒具を着た地元民の少女は、そう申し出た。

#

#　崩れ落ちた建物の中。倒れた騎士たちに、蟻が群がっていた。

#　彼らはサハラがマヤに召喚された町にいた騎士たちだ。自分たちの包囲が突破された後も、周辺街道の検問を強化して粘り強くサハラを追っていた。

#　その甲斐あって彼らは『』総督を発見した。伝令からもたらされた情報をもとに出動の準備を始め、今度こそ逃がしはしないと息まいていた騎士たちだったが、そのタイミングで襲撃をかけられて壊滅してしまった。

#　襲撃者は、メノウとアビィだ。

#「まったく。妹ちゃんに襲いかかろうなんて、悪い子たちだね。年下じゃなかったら肉体ごと分解して赤の素材をごちそうさましてるところだよ！　めッ！　わかったかな！」

#「気絶してるわよ、全員」

#　意識を失った彼らにたかっているのは、小さな部品で構成された蟻だ。導器である武器を解体している。せっせと運ぶ先は巣穴ではなく、アビィの足元だ。三原色の魔導兵である彼女は、運ばれてくる素材を褐色肌に通して自分の中へと収納していく。

#　武装解除と素材補充を同時進行しているのだ。騎士たちの装備をすべて食い尽くした彼女は、自分の下腹部に描かれている歯車マークをつるりとでる。

#「うーん、量も少ないし、素材が粗悪だなぁ。【魔法使い】に減らされた残機に全然足らないし、おねーさんは不満だよ」

#　マヤがハクアに誘い出されたと知ったメノウたちがまず取った行動は、手近の町に設置されている騎士の詰め所に盗聴を仕掛けることだった。

#　いくらアビィの索敵能力が高いといっても、この季節で目立たない程度に飛ばせる蟲の数などたかが知れている。ならばと逆転の発想で、情報収集能力がある集団に見張りをつけた。原罪概念を扱うマヤは、遅かれ早かれ騒ぎを起こしてしまう可能性が高い。そのときに出動するであろう神官たちと騎士たち、二つの動向を見張っていたのだ。

#　マヤを発見したのは町の治安維持をつかさどる騎士だった。すぐさま駆けつけたものの、メノウたちがこの町に来るのと入れ違いでマヤは移動してしまった。

#　だが、少しだけ明るい情報も得られた。

#「マヤのにサハラがいてくれて、よかったわ」

#　マヤがサハラと一緒にいるとの情報だ。一人での行動を諦めて、マヤが召喚したのだろう。メノウにとっては朗報だ。マヤをわれているという事実はあれど、彼女が一人で行動しているわけではないというのが救いだった。

#　メノウとは裏腹に、その情報が凶報となったのはアビィである。

#「よくない。ぜんっぜんよくない。あの生ゴミ、よりによって妹ちゃんを連れてくるとか、ほんっと……！　年下が年上をかばうなんて、非生産的なことがあっちゃいけないっておねーさんは思うんだな！」

#「そうね。そういう考えも存在しなくはなくもないわね」

#　メノウは首肯する。賛同したわけではなく。とてもめんどくさかったので適当に流す構えだ。

#「サハラには期待してるけど、やっぱり確実なのは私たちがマヤと合流することだわ。もし先にマヤがハクアと会ったら、本当にまずいわ」

#　メノウが焦っている理由は、マヤが危険にさらされているからというだけではない。

#「ハクアの狙いは、まず間違いなくマヤの純粋概念【魔】よ」

#　マヤが魂に癒着させた純粋概念【魔】の危険性ゆえだ。

#【魔】の暴走を恐れているわけではない。ここ半年、マヤは自分に宿った純粋概念を怖がっている節があった。一人ならともかく、サハラがそばにいる状況で化するまで純粋概念を使うことはまずないだろう。万が一暴走したとしても、小指でしかないマヤだったら、いまのメノウでも対処ができる。

#　だからメノウが危機感を抱いているのは、そこではなかった。

#「アビィ。アーシュナ殿下と一緒にグリザリカで【】に対抗できたのには、あなたたちの助力が大きく関わっているわ」

#「へっへーん。あのお子様年長者とは違いますから！」

#　革命と呼ぶべきグリザリカ王国の変革を主導したのはアーシュナ・グリザリカだ。だがアビィたち一派の原色知性体の影響は無視できない。いまのグリザリカがハクアであっても容易に手出しをできない戦力を揃えている理由は、彼らにある。

#　知性を得た魔導兵はおそろしく強く、賢い。

#　だが、原色概念は原罪概念に弱いのだ。

#　三原色の発生源となる原色空間は、ほとんど触れるだけで原罪概念異界に浸食されて変質してしまうのだ。力の多寡すら問題ではなく、相性として原罪概念が上位にある。

#「ハクアが【魔】を手に入れたら、グリザリカはあっさり陥落するわ。『り』諸共ね」

#「ほーら。だから、あの汚染生物の性質を甘く見てるっていったじゃん。消毒ぅ！　さっさと消しちゃおう、この機会に！」

#　アビィの主張を黙殺する。

#　今回マヤを誘い出したハクアの狙いは、メノウたちにとっても致命的になる可能性があるのだ。

#【白】の純粋概念は、他の概念を写しとることができる。ハクアが原色概念に対して致命的効果を発揮する【魔】を手に入れたが最後、『絡繰り世』から生まれた魔導兵が主力になっているグリザリカという本拠地が瓦解してしまう。そうなってしまったら、メノウたちがどんな力を得ようと、ハクアにたどり着く前にの数に押しつぶされる。

#　だが、マヤの独断行動がもたらしたのは、必ずしも悪い話ばかりではなかった。

#　ミシェル個人は、メノウたちに絶対に勝てると言っていいほど強い。メノウたちがグリザリカを出たことをすぐに察知した情報収集能力もある。メノウたちがやられて本当に嫌だったのは、『遺跡街』の入り口を固められることだったのだ。

#『』を求めて北大陸に来たメノウたちにとって、たった一つしかない『遺跡街』の出入り口を固めるミシェルをどうやって突破するかが、最初にして最難関になるはずだった。

#　だが今回、ハクアがマヤをおびき出すための待ち合わせ場所を『遺跡街』の入り口にしたせいで、ミシェルは最善の一手を打てなくなった。待ち伏せという策を捨て、むしろメノウたちを『遺跡街』の入り口に近づけないように襲撃しなくてはならなくなった。

#　さらには、北に来て真っ先に襲ってきた『』の様子からして、おそらく内で分裂が起こっている。元処刑人たちを中心として、急速に台頭するミシェルについていけない一部の神官が反発している。彼女たちの目的はわかりやすく組織政治の考えに則っている。聖地を崩壊させたメノウを捕えることで、自分たちの優位を築くつもりだろう。

#　メノウとアビィ、マヤとサハラ、ミシェルとハクア、『』を筆頭とした元処刑人。

#　様々な思惑が錯綜している現状は、メノウたちにとって好機になりえる。

#「肝心のマヤたちは……なぜか、戻ってるわね」

#　壊滅させた騎士たちの詰め所からマヤたちの足取りを割り出したメノウは小首を傾げる。

#　マヤとハクアの待ち合わせ場所は『遺跡街』の入り口周辺で間違いない。だがマヤたちは逆方向に進んでいる。

#「迷ってるのかしら。いっそこのまま期日切れになったら、それはそれでいいんだけど……」

“像是迷路了？这样下去就到截止日期了，虽说这样倒也不是坏事……”

#「メノウちゃんたら、本当におしだね。昔の仲間に甘い言葉をかけられるだけで、ほいほい連れだされたあいつを助けようとしてるんだからさ」

“小梅你还真是个老好人。这么热心帮助一个听到过去好伙伴的两句甜言蜜语就傻傻被骗走的小朋友”

#　アビィが普段の態度に似合わない冷たさで発言する。

雅比的态度与平时相比显得十分冷淡。

#「メノウちゃんは、どういう気持ちであのチビッコを助けるつもり？」

“你打算要帮那个熊孩子的时候，心里是什么感觉？”

#「どういうって……」

“什么什么感觉……”

#「グリザリカが落とされたらおねーさんだって困るし、とりあえずあいつを取り戻すのには協力するけどさ。でも、その後だよ」

“葛里萨利嘉被攻陷的话姐姐我也会陷入麻烦，总之先来帮忙把她救回来。之类的想法之后的感觉哟”

#　しなだれかかってきたアビィが、絡むように言葉を紡ぐ。

雅比朝着梅诺靠过来，一边组织着语言。

#「あいつ、もういらなくない？」

“摩耶，会就此消失？”

#　うっすらとした冷笑とともに放たれたのは、鉄よりも固く冷ややかな声だった。

比钢铁更坚固冰冷的声音随着微弱的冷笑一起出现。

#「あの汚染生物の厄介さがわかったメノウちゃんに、最善っていうのを教えてあげよっか？　今回はとりあえず助けて、その後に除去しちゃうのが一番だよ」

“还要我教你最好的办法是什么吗？对那种污染生物的难缠之处再清楚不过的梅诺酱。这次就姑且帮你，在那之后把她抹去才是最好的”

#　除去。それがマヤを殺すということを意味しているのは明白だ。

抹去。

梅诺明白这就是把摩耶杀死的意思。

#　メノウが無言でアビィの目を見る。だがゴーグルの向こう側にある彼女のは、いささかも揺るがない。

梅诺沉默着看向雅比的眼睛。但雅比那对在风镜后面的瞳孔中，没有任何动摇。

#「百歩譲ってメリットがデメリットを上回るなら考慮してもいいけどさ、もうリスクしかないじゃん。自分勝手な行動をする。情報の出し惜しみもする。自分の能力はこわがるくせに、敵にその能力が取られたら大迷惑。なによりさ、あいつの『自分の価値がなくなるのが怖いんです』っていう態度が気に食わない」

“就算不这样分析利弊再退百步也一样，留着她只是徒增风险。自己随意地行动。不惜泄露情报。而且因为能力非常恐怖，若是被敌人得到更是大麻烦。总地来说，摩耶这种‘十分害怕没有自我价值’的心理十分让人讨厌”

#　マヤが持つ千年前の情報は役立った。から戻ったマヤは、メノウにとっての希望になった。しかし、それだけだ。

摩耶知道的千年前的情报十分有用。她能够从人灾的状态恢复，也给梅诺带来了希望。但是，价值也仅止于此了。

#　マヤは純粋概念を持っているだけのただの子供だ。

摩耶是个只拥有纯粹概念的孩子而已。

#　マヤ自身がそれを自覚していた。

摩耶也清晰地明白这件事。

#　子供の彼女は自分で自分の価値をつくれないから、誰一人味方のいないこの世界で、千年前の情報をちらつかせる態度をとるしかなかった。

在这个不能展现个人价值，就没有人会站在仅是一个孩子的她的身边的这个世界里，她只能选择向梅诺透露千年前的情报。

#「自分がかわいいだけのあーいう老害がのさばるから、かわいい年下の生きる邪魔になるんだよ。死んで欲しい。ねえ、メノウちゃん。ここできっちり確認しておこう？」

“明明自己更大几岁，结果还要祈求着别人帮助，这种事情也太讨厌了。除了可爱之外自己只有年龄在增长，甚至还给可爱的后辈带来麻烦。不如死了算了。梅诺啊，你有好好地理解这种感觉吗？”

#　会話の主導権を損得の理屈で絡めとったアビィが、改めてメノウの意思を問う。

雅比掌握着对话的主导权，解释了其中的得失之后，再一次问起梅诺的想法。

#「あいつに、守るだけの価値がある？」

“摩耶有值得你保护她的价值吗？”

#「……そうね。マヤに関しては、この半年、結論を先延ばしにしていた私が悪かったとは思うわ。あなたが言う通りよ」

“……也是呢。这半年来，一直拖着对摩耶的看法不说，是我不好。你说得有道理。”

#　アビィの指摘は正しい。メノウにとってマヤの存在は鬼門だった。

雅比的指责是对的。对梅诺来说，摩耶一直是个棘手的存在。

#　するべき子供なのに、メノウが自分には助ける資格がないとあきらめた異世界人で、その上『』でハクアの仲間だったというあまりも重要な立ち位置にいる。どの要素を重要視してマヤに接すればいいのかを決めかねた。

本来是自己保护的孩子，但摩耶却不觉得自己需要梅诺保护甚至离开了她。因为『万魔殿』的原因，摩耶还把白亚放到了重要的位置上。梅诺不知道面对摩耶的时候看重哪一个更好。

#　自分の罪を思い出させるマヤに、どんな顔をすればいいのかがわからなかったのだ。ずっと中途半端な態度で接して、マヤのことはサハラに任せてしまっていた。

梅诺不知道用怎样的态度面对总会让自己回想起自己的罪恶的摩耶。总是用犹犹豫豫的态度面对摩耶，甚至于干脆把摩耶交给撒赫菈。

#　屋敷をミシェルに襲撃される前に、アビィは言った。

在那个房间被米歇尔袭击之前，雅比说过。

#　──メノウちゃんって、意外と人の気持ちがわかってないよね。

——梅诺你啊，对人的感情还真是迟钝得让人意外呢。

#　その通りだ。マヤの気持ちがわからないまま放置した。

如雅比所说。自己就这样把没理解的摩耶的感情放在一边。

#　メノウは、アカリのために動いている。【時】の純粋概念に飲まれてしまったアカリを引き戻す手段は現状見つかっていない。記憶の補填はハクアを倒せば必然的に『星の記憶』が使えるようになるはずだが、あまりにも強力な概念武装である塩の剣に対抗する手段が見つからないのだ。

梅诺一直为了灯里而行动着。而且目前还没找到唤醒被纯粹概念【时】吞噬的灯里的方法。为了使用『星之记忆』补充灯里的记忆，就必然需要打败白亚。但盐之剑作为一种概念武器太过强大，梅诺还没找到能够应对它的手段。

#　時と塩に囚われたままのアカリの体はモモに任せてある。モモならば信じられる。だからこそ、いまメノウはハクアへ対抗するための力を得ることにリソースを費やしている。

把被困于时与盐的灯里交给茉茉。茉茉是可以完全信任的人选。但正因如此，现在梅诺在对抗白亚的时候，也就不能再得到导力补充。

#　ハクアがアカリを狙っている以上、ハクアとの対峙は避けられない。だからこそメノウはグリザリカをから切り離した。『星骸』の管理権限を得ることができればハクアへの対抗手段となる。だから、メノウはグリザリカを出てまで北に来た。なのに、マヤは意図せずしてグリザリカ崩壊の引き金をひこうとしている。

为了得到能够与白亚对抗的『星骸』的管理权限，梅诺离开葛里萨利嘉，来到大陆的北方。然而，摩耶正在做的事，或许正在无意中会成为导致葛里萨利嘉崩溃的关键

#　だから、今回の事件をマヤと向き合うための契機にするのだ。

因此，这次的事件说不定能成为自己直面与摩耶的关系的契机。

#　マヤがどうしたいのか、なにを求めているのか。

摩耶想要做什么，又在期盼着什么？

#　様々なレッテルに惑わされて彼女の気持ちから目を逸らしていた。ないがしろにし続けていたマヤの心と向き合う時がきたのだ。

被各种评价而迷惑的自己总是在逃避摩耶的心情。如今是时候正视自己一直以来忽视的摩耶的心情了。

#「マヤとは、追いついたらきっちり話すけどね、アビィ。それとは別の話で、前も言ったけど私はあなたのことをまったく信用してないの」

“等追上了摩耶之后，我就听你的和摩耶好好聊聊。不过一码归一码，这次听一会你的话，但我依然不会信任你的”

#「ええー？　おねーさん、こんなに好意的なのに？　役立ってるのに？　奉仕してるのに？」

“诶诶——？明明姐姐我都这么好了？这么设身处地，还提出了这样又建设性的意见”

#「あなた、擬態の要素にアカリを入れてるでしょう」

“你的拟态用了一些灯里的材料吧”

#　ぴたり、とアビィが停止した。

雅比的动作突然停顿了。

#　顔が能面を被ったかのように動かない。不随意筋すら完全に止まった、不自然な停止だ。

表情就像盖了一层面具一样定住。就连平滑肌都不自然地停止了活动。

#　魔導兵──特に、アビィのように知性を得ると、彼らは自分をつくり変えて擬態することができる。だがなんでもかんでも好きなように変化することはできない。擬態には条件があるのだ。

魔导兵——特别是雅比这样拥有智慧的，他们能够通过拟态改变自我。但这种变化存在着条件，并不能随心所欲地进行拟态。

#　擬態するものを、取り込む。

要首先取得要拟态的东西。

#　それが擬態を完成させる条件だ。

这就是完成拟态的条件。

#「……なんのこ──」

“……你说什——”

#「わかるわよ。上っ面の言動がそっくりだもの。顔つきと体つきも、アカリが大人になったら、っていう感じだわ。むしろ、どうしてわからないと思ったの？」

“我知道的。单是言行举止就已经和灯里一模一样了。至于脸型和身体，就是灯里长大之后的样子吧。不如说，你为什么会觉得我察觉不到？”

#　メノウは冷え冷えとした視線を向ける。

梅诺冷冷地看着雅比。

#　肉付きのいいグラマラスな肢体。成人として成熟しながらも、親しみを感じさせるかわいらしさを残した顔つき。人懐こい言動と明るい笑顔。十六歳だったアカリが成長して大人になれば、まさしく彼女のようになっただろう。

丰满迷人的身体。成熟却残留着梅诺熟悉的可爱感觉的脸蛋。蔼然可亲的言行和明亮的笑容。十六岁的灯里长大成人的话，一定会和眼前的雅比一样吧。

#「この際だから聞くわよ。どうしてあなたが、人体の擬態にアカリの要素を入れているの？」

“所以我现在就问你。为什么用灯里的素材进行拟态？”

#「メノウちゃん……怒ってる？」

“梅诺酱……生气了？”

#「……そういう反応、本当にアカリにそっくり」

“……你这反应，真的跟灯里一模一样”

#　メノウがアビィのゴーグルを外す。

梅诺摘下雅比的风镜。

#　ゴーグルで隠していた彼女の目があらわになる。黒目に縁取られたマリンブルーの瞳孔は、自分が持つ富すべてをなげうっても惜しくないと思わせるほど美しくきらめいている。

风镜的后面是雅比一直藏着的双眼。黑曜石一样的眼球上嵌着海蓝色的瞳孔，闪烁着美丽的光芒。若能有用这样一双眼睛，简直让人觉得千金散尽也在所不惜

#　この瞳がある限り、メノウは彼女が魔導兵であるということをはっきりと認識できた。

看着这双眼睛，梅诺就能清楚地认识到眼前这个人是魔导兵。

#「ねえ、アビィ。『絡繰り世』第十二区長、アビリティ・コントロール。東部未開拓領域のスキルの支配者」

“听着，雅比。『机关世界』第十二区长，雅比莉提·康卓尔。东部未开拓领域技能的支配者”

#　人外の宝石の瞳と、まっすぐ視線を合わせた。

非人的宝石之瞳，与梅诺的视线交汇。

#「質問に答えなさい。私たちに会うまでは『絡繰り世』にいたはずのあなたが、ほんの半年前に初めて人の世界に来たはずのあなたが、アカリとどういう関わりがあるの？　あなた、本当はどうして、私に接触したの？　もしかしてとは思うけど ──モモに、なにかした？」

“好好回答我的问题。在与我们相遇之前本该在『机关世界』，在半年前才初次来到人类世界的你，和灯里有什么关系？你与我接触到底是有什么目的？还有一种可能——你对茉茉做了什么？”

#「あー……」

“啊—……”

#　顔を逸らしていたアビィが、不意にゴーグルを上げてメノウと視線を合わせる。

本来已经看向别处的雅比，突然抬起风镜，直直地看向了梅诺。

#「ごめん。言えない。これは、いまここにいるおねーさんの存在意義に関わることだから」

“抱歉。我不能说。这关系到姐姐我如今在这个地方的意义”

#「……そう」

“……这样啊”

#　アビィはく秘密を抱えていることを白状した。少なくともいま、モモとの関連を否定しなかった正直さに免じて、追及を緩める。

雅比爽快地坦白了自己保留着一些秘密。至少看在雅比老实地没有立刻否认自己和茉茉的关系，这个疑问就晚点再提。

#　そもそもいま発した問いについても、メノウは脳内で仮説を立てている。十中八九、モモとアカリは無事だ。どういう交渉をしたかまではわからないが、よくぞ、こんなアカリの隠し場所を見つけたとモモに感心したほどである。

就算现在没有问起这些事，梅诺心里也已经有大致的猜想了。茉茉和灯里目前十有八九平安无事。虽然不知道进行过怎样的交涉，但很好，梅诺对茉茉给灯里找到了这样一个隐蔽的地方十分感动。

#「ま、いくつか不可解な点はあるけど、いまは納得しておいてあげるわ」

“嘛，虽然不知道是什么神秘的地方，但我现在相信你了”

#「うーん。メノウちゃんが疑い深いよぉ」

“唔嗯。梅诺酱真是多疑”

#　おいおいと泣くアビィを黙殺して、周囲に意識を向ける。マヤたちへの追撃から注意を逸らすためにとはいえ、これだけ派手に騎士の詰め所を破壊したのだ。すぐにも追っ手を派遣するだろう。ミシェル本人が現れても少しも驚かない。

梅诺无视了开始假装哭起来的雅比，注意起周围的环境。为了分散去追击摩耶的人的注意力，梅诺大张旗鼓地解决了这个骑士的聚集点。应该很快就会有第一身份的人追来吧。就算是米歇尔本人现身，梅诺也不觉得惊讶。

#「……」

“……”

#　メノウは自分がとるべき行動を思案する。

梅诺开始规划起自己接下来要采取的行动。

#　マヤと合流することは大前提だ。メノウはマヤの目的地を知っている。下手に追いかけるよりも、あの教典に記されていた位置で待っていたほうが効率的かもしれない。

与摩耶汇合是行动的首要目标。梅诺知道摩耶的目的地。比起闷头追赶摩耶，在那个教典记录的目的地守株待兔说不定是更好的选择。

#　だが、そもそもいまの道筋だとマヤが『遺跡街』の入り口にたどり着けない可能性がある。そうなると二手に分かれるべきだが、気になることがある。

但是，从现在的走向来看，摩耶说不定没法按时到达『遗迹街』的入口。这样的话，或许应该分成两队才能顺利与摩耶汇合。

#「ハクアが聖地から出てくることは、まず、ないとは思うけど……」

“首先白亚应该不会离开圣地跑来这里……”

#　本当に、記憶の補充のできない北大陸までノコノコと顔を出して来たら、それはハクアに一撃を食らわせる千載一遇のチャンスでもある。

确实如此，若是白亚风尘仆仆跑来这个不能补充记忆的北部大陆，可就是千载难逢的给白亚一计重创的好机会。

#　考え込んでいたメノウは、ひやりとした感触に顔を上げる。

陷入思考之中的梅诺，突然打了个寒颤，露出了些许感慨的表情。

#「……雪ね」

“……下雪了”

#　厳寒の季節は過ぎても、北大陸の冬が完全に過ぎ去ったわけではない。メノウは手のひらに落ちた雪の結晶を、ぎゅっと握って溶かした。

虽然最寒冷的时候已经过去，但北大陆的冬天还没有完全结束。飘到梅诺的手中的细小冰晶，随着梅诺把手握起来的动作而融化。

#　行動は決まった。

做好决定了。

#「二手に、分かれるわ。アビィ。それにあたって、一つ聞きたいんだけど」

“雅比，我们分头行动吧。但现在，我有个事还想问问你”

#　最強の難敵、ミシェルを出し抜くために、アビィに重要なことを尋ねる。

为了在目前最强的敌人米歇尔手中抢得先机，有一个重要的事情要问雅比。

#「あなたが擬態するのに必要な素材情報は、どの程度？」

“你能够进行拟态的必需的材料，需要哪些？”

#

#　雪が降り始めた街中で、一人の神官が頼りない足取りで道を歩いていた。

一个神官迈着轻飘飘的脚步走在开始下雪的街道上。

#　反ミシェルの神官たちをまとめた『』だ。彼女はうっすらと積もり始めた雪にも気が付かず、思考に熱中していた。

她是聚集起反对米歇尔的神官们的『教官』。她没管地上积起来的一层薄雪，而在专注地思考。

#　情報提供者から、メノウたちの行動経路も摑んだ。戦力も集まっている。なにもかもが順調だ。『』個人の気力も、いつになくしている。

从线人那里整理出梅诺几人的行动线路。聚集战力。这一切都十分顺利。『教官』也感觉自己比起平时，浑身都充满了力量。

#「私は……私こそが……『』を抹殺して、の正義を……使命を……」

“我要……只有我……把『阳炎的后继』抹杀，把第一身份的正义……使命……”

#　ぶつぶつと自覚なく独り言をいている彼女に、通りがかる人は気味悪そうな視線を向けてそそくさと道をあける。自分を遠巻きにする周囲の反応がまったく気にならないほど、『』のコンディションは整っていた。

路过的人们都对正在低声念叨着自己都没注意到的话的『教官』保持着距离，投去厌恶的眼光匆匆走过。『教官』完全不在意周围人近而远之的态度，心情良好。

#　神官たちを秘密裏に集め、反ミシェル派閥を作り上げた会合から異常なほどに調子がいい。全身が目であり、耳であるかのようだ。感覚が鋭敏になりながらも、肌を刺す寒風をものともしない強靭さを兼ね備えている。

与反米歇尔的派系会合，秘密地进行了集会之后，她觉得自己的状态异常得好。五感敏锐，眼观六路耳听八方。与此同时，又兼具着直面周身刺骨寒风的强健身体。

#　その感覚通り、ローブに隠れた全身の肌に目玉が生まれ、耳の穴が穿たれていることに『』は気が付いていなかった。彼女は脳が焼き切れるほど思考をフル回転させ、メノウたちの現状を分析する。

正如她的感觉一样，『教官』没有意识到自己隐藏在宽大的神官袍之下的身体上正在长出眼球，耳道在被贯穿。她还在飞速地思考着梅诺等人的现状。

#「サハラの出現……まさか、本当に長距離転移であるはずが……ならば──召喚、か？　原罪魔導……ならば、最初に発見された子供は……『』は、こいつらを追って……いや？　それではあまりも……ならば……そうか。魔導兵が、傍にいるなら……！」

“撒赫菈出现了……应该是很长距离的转移，难道……这样的话——召唤，吗？原罪魔导……这么说，最早发现的那个小孩子是……『阳炎的后继』正在追她……不对？这样的话也太……不过……懂了。只要魔导兵，在她身边……！”

#　自分たちの裏をかこうとする意図を見抜いてメノウたちの行動の全容を描く。思考が恐ろしく澄んでいる。自分の全盛期が訪れている。いまなら誰にも負けない。徐々に異形へと変化している自覚もなく、『』は歩きながら教典の通信魔導で仲間に指示を出す。

她用清晰得可怕的思路，看穿了梅诺借神官的行动将计就计的想法，猜测出了梅诺全部的计划。如今的自己就处在全盛的状态。不管遇到谁，自己都不会落败。『教官』还没意识到自己的身体在缓缓发生变化，一边走路一边用教典的通信魔导向己方发出指示。

#　純粋概念を扱う『』や、異様なほどの実力を持つミシェルすらも打ち破れる。根拠なく自分の勝利を確信できる万能感が彼女を満たしている。

不管是取得纯粹概念的『阳炎的后继』，还是强大得异常的米歇尔，她都能够打败。全身洋溢着无所不能的感觉，这让她不需要理由也确信自己将取得胜利。

#「らの行動は、読めた……単独ならば……これだけ、仲間が集まれば……数で『』をすりすことも……」

“已经看穿，你们的计划……单独一人……也就这样，与同伴一起的话……靠人数也可以击溃『阳炎的后继』……”

#　──くはっ。

——咕哈。

#　いま、自分をあざ笑う声が、聞こえた気がした。

突然，听到了嘲笑着自己的声音。

#「ッ！」

“！”

#　ばっと勢いよく背後を振り返る。

『教官』猛地转身向后。

#　だが赤黒い髪をした長身の神官の姿はない。いかにも無力なの市民が、『』の突然の挙動に不審と恐怖がない交ぜになった瞳を向けている。

但那里并没有高个子的红黑头发神官。只有因为『教官』突然的举动而感到不安与恐怖的普通的第三身份投来的目光。

#　ただの幻聴だ。

只是幻听而已。

#　しかし、『』にはすでに幻聴と現実の区別がつかなくなっていた。

但是，对『教官』来说，这幻听和现实简直没什么区别。

#「まだ、足りないのか……『』……？」

“现在，还没够吗……『阳炎』……？”

#　見えもしない者を見るために、目を細める。

『教官』眯起眼睛，像是为了看到那不存在的身影。

#　答えは当然ない。だが、はっきりとわかった。自分が全盛期になった程度の力では、並みの神官を集めた程度の計画では『』をつのに届かない。処刑人の価値を証明するには足りないのだと、いまの笑い声を聞いて確信できた。

这个提问当然无人护垫。但是，她很明白一个事情。那就是即使自己有着全盛时期的力量，还召集了诸多神官的这个计划，并不能顺利击败『阳炎的后继』，更是不足以证明处刑人的价值。刚刚的笑声一定就是在嘲笑着这样的自己。

#『』はぎりぎりと奥歯をすり合わせて鳴らす。

『教官』咬紧后槽牙，发出咯啦咯啦的声音。

#　力が足りないから、奴にあざ笑われる。足りないものは補充する必要がある。

力量不足就会被她嘲笑。自己亟需补充缺乏的力量。

#　頰の傷が、うずく。

脸上的伤还在作痛。

#『』は、安宿に入る。そこにいるのは、自分の教え子だった白服の神官たちだ。愚かしくも、唯々諾々と異端審問官の指揮下に入ろうとしていた。『』の呼びかけにも応えることがなかった、処刑人の風上にも置けない裏切り者だ。

『教官』走进小客栈。自己教导的辅佐神官们就在那里。愚钝又唯唯诺诺诺的她们如今属于异端审问官麾下。都是没有回应自己的号召，把处刑人的尊严置于一旁的背叛者。

#「『』？　いままでどこに──」

“『教官』？您都到哪去——”

#「お前たち」

“你们”

#　そこにあるのは、【力】だ。

所需的【力】就在这里。

#　意思が違うのならば、同じにしてやればいい。

虽然意思有微妙的区别，但结果一样就没关系。

#　処刑人には価値がある。いままで世界の平穏を守ってきたのは自分たちだ。

我等一直以来守护的世界的和平。就是处刑人的存在价值。

#　だから処刑人を終わらせるわけにはいかない。

所以处刑人不会消失。

#　彼女たちに、手を伸ばす。無数の目玉がぎょろつく腕を見て、白服たちがぎょっとする。

『教官』对她们伸出手。白服们看到粘附着无数眼球的手臂，被狠狠吓到了。

#　取り込むのに、手では足りない。そう思ったら、自然と腕がに割れた。割れ目にはずらりとギザギザの歯が並んでいる。

用手没办法用来吞噬她们。『教官』刚一这么想，手臂自然地分成了两股。分开的地方排列着锯齿一样的牙齿

#　巨大な口を開く腕が、ばくんと白服をみにする。『』は、いま目の前にいた元部下を殺したという自覚すら抱いていない。ただ自分の指揮下に入れたという認識があるだけだ。

手臂上张开的巨嘴，把白服整个人一口吞下。『教官』只觉得她们重新回到了自己麾下。甚至没有意识到自己刚杀死了过去的部下。

#　悲鳴が上がった数分後。

房间里的惨叫持续了几分钟后。

#　部屋から出てきたのは、藍色の神官服をまとった神官の一人だけだった。

从房间里出来的，就只有身穿蓝色神官服的『教官』一人。

#『』の力はさらに膨れ上がっていた。力の充実ぶりは自分の腕が三倍に増えたかのようであり、いくつもの思考を並列に処理できる頭の冴えは、未来を確信できるほどだった。

『教官』的力量已经增强了许多。充实起来的力量达到了之前三倍的样子，敏锐的思维甚至能够同时思考多个事情。这让『教官』对接下来的计划更加充满了信心。

#　先ほどの思考では、足りなかった答えが出ていた。

她对之前自己想到的不足，做出了回应。

#「そうか……『』を追うだけでは……ミシェルっ……奴がッ、あの小娘がァあああああ！　この私を、誇りある処刑人をォ！」

“好了……不过是追击『阳炎的后继』……米歇尔……她，那个黄毛丫头啊————！就让我，让真正的处刑人……！”

#　すでに呟くという声量ではなく、叫び散らしながら道を歩く。いよいよもって、『』を見る周囲の目は異常者に向けるそれになっていた。

这次就不再是低声念叨，而是一边走在街上一边高声大喊。周围的人们终于发现了『教官』的异常。

#「ふッ、ふぅー……貴様の……貴様らの思い通りにぃ……などォ！　なるものかぁァ！」

“呼，呼—……现在……如你……你们所愿……了吧！是吧！”

#　原罪魔導に浸食されて、降る雪の冷たさすら感じることもなく、『』は瞳を凶暴にぎらつかせて町を出た。

被原罪魔导侵蚀的『教官』，已经连飘雪的寒冷都感觉不到了。她的眼中闪烁着凶狠的光芒，离开了小镇。

#

#　雪が本格的に降り始めていた。

真正的大雪开始飘落了。

#　しんしんと降る雪が、街並みを真っ白に染め上げていく。雪が積もるにつれて、町が静かになっていく。

纷飞的鹅毛大雪，把街道都染成了纯白色。随着白雪不断堆积，小镇里也变得越发平静。

#　サハラはその光景を、とある魔導工房の屋内から眺めていた。

撒赫菈在魔导工坊的房间里向外看着这幅风景。

#　室内は温かい。暖導器が発する熱が部屋を暖めて、二重窓に断熱素材の厚い壁の雪国の室内は熱を逃がさない構造をしている。文明のでぬくぬくと温まりながらサハラは口を開いた。

房间里十分暖和。不但房间里有暖气制暖，这座建造于北方的房屋也有着双层隔热材料做成的窗户以及厚实的墙壁这种利于保温的结构。感受着文明进步带来的温暖，撒赫菈开口了。

#「いいの？　私たち、世間様では結構な悪人になってると思うけど」

“真的好吗？我们可是与这个世界敌对的恶人”

#「はい、もちろん」

“那当然，没关系的”

#　サハラの確認にいたのは、まだ十二、三歳の少女だ。上下一そろいのツナギを着ている彼女は、どこかで受け取ったらしい号外を突き出す。

肯定了撒赫菈的疑问的是一位只有十二三岁的少女。她穿着一套连体衣，拿出了一张不知从哪拿到的报纸号外。

#「わたし、こんな偏向報道には惑わされませんからっ」

“我，不会相信这种充满偏向性的新闻”

#　少し硬めの表情で主張してから、恥ずかしげに、しかし期待に光る視線をサハラに向ける。

她的脸上带着些许僵硬地说出了自己的想法之后，用有些害羞，但又充满期待的眼神看向撒赫菈。

#「なので……えへへ。『』の総督さんから、『』さんにわたしのことを伝えていただければなって……！」

“那个……啊哈哈。只要『第四』的总督愿意把我的事情和『阳炎的后继』多说说就好……！”

#「…………」

“…………”

#　またメノウがやらかしている。

又是梅诺做的好事。

#　両手の人差し指を突き合わせてもじもじしている少女の姿に、サハラは内心で舌打ちをする。さすがは『』から顔の素質だけは高評価をもらっただけある。多感な時期のな少女の心に、どんなを残しているのか。意識的にやるより、無意識の出会いのほうが人をたぶらかせているのだから恐ろしいの一言である。

看着眼前双手食指相交，样子扭扭捏捏的少女，撒赫菈不禁在心里咂舌。不愧是能从导师『阳炎』那里得到“相貌不错”这种评价的人。她在这种正值多愁善感年纪的可爱少女心里留下了怎样深刻的印记？更可怕的是，梅诺或许并非故意，而仅仅是无意间的相遇就拐走了少女的心。

#　だがメノウをにげる口約束で助かるのなら安いものだ。自分がたぶらかしたわけでもないしと、純な少女の好意にとことん甘えることにする。

但拿梅诺的名义定下口头约定，换得帮助倒是个好买卖。这当然不是欺骗，而是少女这份单纯的好意不利用起来太过可惜。

#「ありがとう。私を助けてくれたんだもの。きっとメノウはすごいサービスをしてくれるはず」

“谢谢。既然你愿意帮我们忙，到时候一定让梅诺好好报答你”

#「本当ですか!?　は、はわわ……！　すごいサービスって──すごいサービスって!?」

“真的吗！？哈，哈啊啊……！报答——报答！？”

#「おそらくね。だから、よかったら、この町を出る協力をしてもらえる？　私たち『遺跡街』に行きたいの。手伝ってくれれば、感謝の印に、なんでもしてくれるわ。メノウが」

“很有可能哦。所以，要是可以的话，愿意帮我们离开这里吗？我们打算前往『遗迹街』。要是帮忙的话，出于感谢，什么要求都会满足你喔。让梅诺”

#「いまなんでもって──え？　『遺跡街』ですか？」

“现在什么都——诶？『遗迹街』吗？”

#　メノウを大安売りするサハラの目的地を聞いて、意外そうに目をしばたたかせる。

撒赫菈把梅诺卖了个好价钱。但少女一听到目的地，意外地睁大了眼睛。

#「なんでものために、わたしも協力したいんですけど……親方がなんて言うか」

“不管为了什么，我都想帮上你们的忙……但还要看师傅怎么说才行”

#「構わん」

“没事”

#　小さく、しかしはっきりと許可が出た。作業場に入ってきたのは、この工房の親方だ。

小事，但也要好好取得同意。开起这家工坊的师傅来到了作业场的。

#「しかし、本当に未開拓領域に行くのか。『』も観光だとか言っていた、なんの用があるんだ？　グリザリカ王国にいたなら、『絡繰り世』のほうが近いし、資源地として優秀だろう」

“不过，真的要去未开拓领域吗？『阳炎的后继』也说要去那边观光，有什么用意吗？在葛里萨利嘉王国的话，离『机关世界』又近，资源也丰富。”

#「本当に、観光。見てみたかったのよ、世界で一番色濃く古代文明が残る街並みとやらを」

“真的只是观光啦。我特别想要亲眼目睹一次这世界上古代文明的气息最为浓厚的古代文明遗留下的城市还有街道”

#　さらっと噓をつく。心得たもので、親方も「そうか」と頷いたきり深くは追及しなかった。

随意地撒了个谎。或许是明白了什么，师傅也“原来如此”地点点头，没有深究。

#「ちょうどいい。『遺跡街』行きの列車には、ほぼ毎日積んでいる荷物がある。二重底でをつくるから、その中に入ってくれ。貨物列車に半日揺られれば、最寄りの資材場に着く」

“正好。去『遗迹街』的火车现在每天都要运送货物。你可以躲在双层的车厢底里面。随着货云列车晃荡半天，就能到最近的物资站”

#「ありがたい……けど、タダじゃないわよね」

“感谢……但是，还有一些请求”

#　この親方が自分たちを助けてくれたツナギの少女のように思考がお花畑だということはないだろう。案の定、親方は「ああ」とを打つ。

师傅应该不会像这位帮助了自己的连体衣少女一样简单地不求回报。果然，他“哦哦”地继续说出声。

#「が東へ入る際に、を図ってくれ」

“我之后打算前往大陆东方，想要张便宜的地图”

#「東……グリザリカに移住するの？」

“东边……准备移居去葛里萨利嘉吗？”

#「ああ」

“是的”

#「ふうん」

“嗯——”

#　移住理由は追及しなかった。サハラは工房に目を配る。

撒赫菈没有追问移居的理由，而是打量起这个工坊。

#　が日常的に使う照明や暖房などの導器に混じって、技術規制ギリギリの品がいくらかある。紋章を複数組み合わせる内部刻印式に、高度な素材学の知見を求めた形跡のある資料本。明確な違反ではないが、ちょうどに目を付けられるボーダーラインだ。目に付かない場所では、さらに突っ込んだ研究もしているだろう。

整合了第三身份平时最常用的取暖和照明的导器，有许多超出了技术管制的物品。记录了能够组合多个纹章的内部刻印式，还有正在用于学习高级的素材学知识的笔记本。说不定在自己看不到的地方，还在做更加深入的研究。

#　素材学と紋章学を組み合わせた魔導工学を追求したい技術者が、規制撤廃の進む東に行きたいという言葉に噓があるとも思えない。

作为想要学习将素材学和纹章学融合起来的魔导工学的技术人员，自称想要前往正在逐步取消技术限制的葛里萨利嘉，应该不是谎话。

#「いいわ。グリザリカに来たら、いくらでも私の名前を使って」

“好啊。在葛里萨利嘉遇到什么困难的话，就报上我的名字吧”

#　あっさりと承諾する。実際、サハラにとって難しいことではなかった。彼らが自力で東に来たのならば、適当に他の人に頼めばいいのだ。それこそ、メノウの責任にしてもいい。

撒赫菈立即就做出了承诺。实际上这对撒赫菈也不是什么难事。他们要是凭自己的力量去到葛里萨利嘉，应该也能遇到值得信赖的人。实在不行，推脱给梅诺就完事了。

#　親方技師の条件を聞いて、ツナギの少女がぴょんぴょんと手を挙げる。

听到父母提出的条件，连身衣少女兴奋地举起了手。

#「わたしも！　わたしも行きます！　グリザリカって『』さんの本拠地ですよねッ？」

“我也要！我也要去！葛里萨利嘉，就是『阳炎的后继』的根据地对吧？”

#「お、おい……お前は、違うだろ。家族はどうする」

“喂，喂……你就算了吧。家里人怎么办”

#「弟子入りした時、お母さんから『一人前になるまで帰ってくるな』って言われました！　一人前になるための旅修行です！」

“在决定当您的弟子的时候，妈妈就对我说『能够独当一面之前就不要回来了』！所以我要为了能够独当一面而踏上修行旅途！”

#「男前だな、お前のおふくろさん!?」

“那个女汉子是你妈！？”

#　どうやら決着は弟子の少女の勝利で終わりそうだ。サハラは魔導技師の師弟の掛け合いを背中に、湯気の出ているマグカップを二つ持って立ち上がる。

不管怎样，最后的决定看来是作为弟子的少女取得了胜利。看着打闹的师徒二人的背影，撒赫菈端起两个冒着热气的马克杯站了起来。

#　寡黙な親方のみならずあの少女までがグリザリカに入ったら。そしてもし彼女たちと出会うことがあれば、さぞかしメノウは戸惑うだろう。

不止是稳重的师父，那个少女如果也去到葛里萨利嘉的话。如果碰巧遇到了他们，梅诺大概会非常困惑的吧。

#　その時のメノウが困る顔が目に浮かぶと、サハラは胸をぽかぽかさせて二階に上がった。

到时候梅诺迷茫的表情仿佛已经浮现在眼前，撒赫菈不禁有点激动，然后走上了二楼。

#

#　マヤは二階のベランダに出ていた。

摩耶出去到二楼的阳台里。

#　雪がどんどん強くなっている。視界は真っ白だ。

雪下得越来越大。眼中所见都成了白色。

#　白い光景を見ると、どうしても彼女のことを思い出す。

看到这茫茫的雪景，忍不住地就想起她的事情。

#　メノウとほとんど同じ顔をした、マヤの勇者。

和梅诺的脸完全一样的，摩耶的勇者。

#　シラカミ・ハクアのことを。

白上·白亚。

#　千年前、彼女は自分たちを裏切った。

她在千年前背叛了自己以及同伴们。

#　だというのに、いまさら会いたいのだという。

然而，自己如今却还盼望与她见面

#　サハラは、騙されているんだろうと言う。マヤだって、ハクアがロクでもないことを企んでいるのだと半ば確信している。

撒赫菈说，自己多半是被骗了。就连摩耶，都变得开始怀疑白亚是不是有什么不为人知的企图。

#　だからこそ、あの時、自分だけがやれることを思いついたのだ。

于是，那个时候，自己想起了一个只有自己才能做到的事。

#　自分を裏切り続けたこの世界に一矢報いる、冴えた方法を。

一个切实地对这个总在背叛自己的世界报一箭之仇的方法。

#「でも……もし」

“但是……如果”

#　決意したはずのいまですら、マヤは万に一つの可能性を捨てきれない。

如今既然已经做出决断，哪怕只是万中存一的可能性，摩耶都不想放弃。

#　なにかどうしようもないわけがあるんだと、過去の裏切りを許せるほど重大な理由があるんだと、それさえ知れば元の関係に戻れるほどの真実があるんだと。

虽然可能忙到最后也只是一场空。但或许白亚真的有重要得可以让摩耶原谅她的背叛的理由，若是能知道那个理由，能回到曾经的关系的可能性也是真实存在的。

#　マヤは、自分でも信じていない真実とやらを、信じたかった。

摩耶想要相信一次一直以来都不怎么可靠的自己。

#　雪の降るベランダにたたずむ。彼女の体が寒さを感じることはなかった。吐く息が白くなることもない。な、しかし決定的な違いを見るたびに、マヤは思い知らされるのだ。

站在被落下的雪花慢慢覆盖的阳台上。摩耶感觉不到寒冷，自己的呼吸也不会出现白雾。虽然早就有了预感，亲眼目睹的这一决定性的区别彻底让摩耶明白了。

#　ああ、自分はもう、人間ではなくなったのだ、と。

啊——，这具身体，自己早已不是人类了。

#　マヤはすでに日本に戻る資格を喪失している。痛いほどに、自分の異質さを自覚している。

这样的自己已然失去了回到日本的资格。认识到自己的异常，让她十分痛苦。

#　肉体が人間とは違うものになった自分は、決して元の世界には戻れない。

似人而非人的自己，决不能回到原来的世界。

#「……戻る意味も、もう、ないのよね」

“……回去的意义，也已经，消失了呢”

#　顔に浮かべたは、幼い顔立ちに似合わぬほどに手慣れていた。

自嘲在摩耶脸上浮现，熟练得不像是十岁的小孩子。

#　日本に戻っても、待っている人間がいないことを知っていた。どんな犠牲を払っても会いたいと思っていた母は、日本にいないのだ。

就算回到日本，摩耶也知道等着自己的那个人早已不在。日本已经没有自己不管付出多少牺牲也想要见到的母亲了。

#　千年前とは違う。自分を必要としてくれた場所に帰りたかったあの頃とは、違う。

与千年前不一样。自己想要回去的那里，那个把自己看得最重要的地方。现在已经不存在了。

#　マヤを必要としてくれる世界はなくなり、と化した自分は、いまだに南でとぐろを巻いている。

最看重摩耶的世界已经不再，而人灾化的自己，正在世界的南方待着。

#　小さく、歌を口ずさむ。

摩耶轻轻地哼起歌。

#　もちろん、童謡ではない。アップテンポのリズムで歌われるのは、マヤがいた日本で流行の曲だった。踊りの振り付けも頭に入っている。

当然不是童谣。摩耶所歌唱出的舒缓的（找到是指轻音乐或者爵士，小孩子唱爵士怪怪的，就选了轻音乐➡️舒缓）节拍，来自摩耶曾在日本时流行的曲子。自己现在还记得对应的舞蹈

#　歌が好きだった。

喜欢歌曲。

#　踊りも好きだった。

也喜欢跳舞。

#　小さい頃から子役になって、映画に出た時に母は喜んだ。将来は女優さんだとしそうに言っていたけれども、マヤがれていたのは歌って踊るアイドルだった。かわいさを認められて輝いている彼女たちになりたかった。

小时候，母亲看到自己在电影中作为儿童演员出演的时候十分开心，说摩耶就是将来的女演员。但摩耶的梦想是能唱歌跳舞的偶像。她憧憬着在台上闪闪发光，挥洒可爱的偶像们。

#　そのことを打ち明けて、母親とケンカをすることすら、できなかった。

她和母亲说了自己的梦想之后，大吵了一架，被母亲否定了。

#「いい歌ね」

“这歌真好”

#　ベランダに続いている二重窓が動く。サハラだ。マヤは歌を止めて振り返る。

阳台上的双层窗户动了。摩耶停下歌声，回头看向走来的撒赫菈

#　サハラの吐く息は、まだ白い。

撒赫菈呼出白色的雾气。

#「寒くないの？」

“你不冷吗？”

#　マヤとは違い防寒具を着こんだ彼女が話しかけてくる。

全副武装的撒赫菈对衣着单薄的摩耶如此问道。

#「雪も降ってるし、その軽装だと風邪をひくとかじゃなくて凍え死んでもおかしくないけど」

“都已经下雪了，还穿那么轻薄的衣服，可不止是感冒，冻死都不奇怪”

#「寒くない」

“我不冷”

#　マヤは答える。これだけは強がりではない。

摩耶回答道。只在这件事情上不用逞强。

#「この世界に来てから、そういうの、なくなったの」

“自从来到这个世界，我就已经没有这些感觉了”

#　マヤがこの世界に召喚された時に得た純粋概念【魔】は、魂よりも肉体に癒着している。

摩耶被召唤来这个世界时得到的纯粹概念【魔】，比起灵魂，更是持续地维持着她的身体。

#　外気温程度の温度差は、ほとんど体感できない。原罪概念に適合した肉体は、体調不良になるということがない。病気にかからないのだ。それどころか、空腹感すらない。飲まず食わずでも、生命維持に支障が出ないのだ。

外界的气温变化，大体已经感觉不到了。与原罪概念十分契合的这具身体，再也没有过任何病痛。除了疾病无影无踪之外，就连空腹感都消失了。就算不吃不喝，也不会出现身体问题。

#『自己召喚』というマヤの生命維持の原理がどうなっているのかというは、導力文明の最盛期である千年前ですら解明できなかった。

这种维持着摩耶生命的所谓『本体召唤』到底是什么，就算是导力文明最强盛的千年前，也没能得出结果。

#　多くの不快感を取り除かれる代償に、同じほどの感覚を失った。マヤの肉体に癒着した純粋概念の性質に着目し、利用したがっていた研究者は山のようにいた。

这些难过一同消失的还有对应的感觉。这种能够自动修复摩耶的身体的纯粹概念的性质，有山一样多的研究者对此充满兴趣，或是想用作实验。

#「なるほど」

“原来如此”

#　そんな背景を知らないサハラは、いまさらながらマヤが北の寒冷地でワンピースに着物をっただけで行動できているわけを納得していた。

撒赫菈了解了这些事情之后，才明白摩耶为什么在这样天寒地冻的北方，还能只靠一件紧身衣和披在身上的和服就可以任意活动。

#「これから、どうする？」

“之后，准备干什么？”

#「…………」

“…………”

#　マヤは黙りこむ。無視をしたのではない。答えられなかったのだ。

摩耶沉默了。她不是无视了撒赫菈，而是她回答不了。

#　逆戻りをしたことで、目的地である『遺跡街』の入り口から遠ざかってしまった。歩きでは、どうあがいても不可能な距離だ。移動するためにマヤが魔物を召喚すれば、前の町の時のような騒動になる可能性が高い。第一、これ以上に純粋概念を使って記憶を削りたくなかった。

因为往回走了一些时候，现在已经距离目的地『遗迹街』越来越远了。是一个单靠步行怎样都赶不及的距离了。若是为了赶路而召唤魔物的话，大概率又会像上一个小镇那样引发骚动。最重要的是，摩耶不想为了这种事情消耗记忆使用纯粹概念。

#　いまはまだ、使うべき時ではないのだ。

现在，还不是要使用纯粹概念的时候。

#「……イチかバチかで導力列車に乗るのよ。そうすれば、ハクアとの待ち合わせに間に合うわ」

“……不如试试能不能坐导力列车。那样的话，还赶得上见白亚”

#「あんまりいい手段だとは思えない」

“我不太觉得这是个好方法”

#　マヤの案に、サハラは温かいココアの入ったマグカップを渡しながら答える。

撒赫菈一边把装着热可可的马克杯递给摩耶，一边回答着自己对摩耶的提案的想法。

#　一番変化したのは皮膚感覚だが、味覚もかなり変容している。唯一変わらないのが甘味だけだった。だからこの世界に来てからずっと、マヤは甘いものばかり食べている。

变化最大的不止是皮肤的感觉，摩耶的味觉也有着相当程度的变化。但她还保持着一如既往的对甜味的感觉。所以摩耶自来到这个世界开始，就一直只吃甜食。

#　空に浮かぶ『星骸』は、この雪の中でも視認できる。ぼんやりとした導力光を放つ物体は、むしろ雪の中に浮かびあがって幻想的な雰囲気を増している。

即使在下雪，也可以看到『星骸』一直漂浮在空中。不如说穿过雪幕，看到一个物体浮于空中，隐隐地放出导力的辉光。这幅画面简直充满了幻想色彩。

#　いま、強い力を持つアレを中心にして事態が回っている。

如今，有许多事件开始围绕着那个拥有强大力量的东西发生。

#　弱いからこそ、のけ者にされているマヤとは違って。

但这一切与因为弱小而被排除在外的摩耶来说不一样。

#　だからマヤは、誰もかれも出し抜いて、あっと言わせてやるべく、メノウから離れて単独行動をした。

所以摩耶为了赶在所有人前面，让她们因自己而惊讶，从梅诺身边离开，独自行动。

#「サハラは、案がないの？」

“撒赫菈呢，有计划吗？”

#「貨物列車にこっそり乗り込むくらいね。北大陸の中心部までの貨物運行は、資材運搬で活発みたいだから」

“差不多也是偷偷登上货运列车呢。列车似乎会把货物一直送到北大陆的中心地带。最近好像是因为要运输物资，班次很多。”

#「なによ。あたしのと変わらないじゃない」

“什么啊。这不是和我的计划没什么区别嘛”

#「失礼ね。ここの親方に話を付けてある。輸送する荷物にれこめそうよ」

“抱歉。这工坊主的意思好像是可以混进要运送的货物里面”

#　し紛れのマヤと違って、きちんと算段を付けてある。サハラの提案を聞いて、むっと唇をらせる。

和陷入苦恼的摩耶不一样，撒赫菈好好打听了消息才做出了计划。摩耶听到撒赫拉的提案，撅了撅嘴。

#「……そこまで決まっていたなら、なんであたしに聞いたのかしら。先に言えば褒めてあげたのに」

“……既然都做到这份上了，刚刚干嘛还问我干嘛。你要早点说我就夸夸你了”

#「どうせならあきらめて中止してほしかったから」

“因为我终究还是希望你能别去『遺跡街』的入口”

#　サハラはこともなく返答する。

撒赫菈毫不迟疑地给出回应。

#　そもそも強制的にび出された彼女は、この旅に積極的ではないのだ。明らかに騙されているとしか思えないマヤの独断行動はもとより、それ以前にメノウやマヤが求めている『星骸』の管理権限についても、サハラにとっては興味の対象ですらない。

说到底她也是被强制召唤到自己身边，路上一直以来都没什么干劲。而且，不管是摩耶这赤裸裸的被骗之后的独断行为；还是以前的时候梅诺向摩耶问到的『星骸』的管理权限相关的事情。对撒赫菈来说都是一点兴趣都没有的事情。

#「いまからでも、私は東に戻りたい。【星読み】探しの『遺跡街』探索なんてメノウたちに任せればいいじゃない。そして私たちはしばらくここに潜伏して、ほとぼりが冷めた頃にグリザリカに帰る。怪しげな誘いは無視。ほら、なんの問題もないわ」

“就算是现在，我也只想回葛里萨利嘉。探索『遗迹街』寻找【读星】之类的事情交给梅诺她们不就行了。至于我们，就暂时在这里藏一段时间，等风头过去之后就回葛里萨利嘉。那些奇怪的诱惑就暂且无视。你看，这不就什么问题都没了吗”

#「そんなこと言うなら、あたしのことなんて放っておいて。あたしにはやるべきことがあるんだから」

“既然你都这么说了，那就请你早点放我自己走。我可是有必须要做的事情。”

#「マヤが私を喚び出したのよ。いまさら、そんなことを言われても困る」

“我可是被你给叫出来的啊。你事到如今，怎么还说这种让人头疼的话”

#「なによ……」

“什么啊……”

#　あまりにも無責任なサハラの口ぶりに、自分でも思わぬほど突然、マヤの感情が炸裂した。

听着撒赫菈满嘴与她无关的语气，突然之间摩耶的感情激动得连自己都想象不到。

#「マノンを助けてくれなかったくせに、サハラはなんであたしにそんなことを言えるの!?」

“明明你自乙开始就没想过要帮玛农，你为什么还要和我说那些话！？”

#　予想もしていなかったに、サハラが目を見張った。

撒赫菈惊讶地听到了完全在意料之外的话。

#「マノンはサハラのことを友達だって言ってたのに！　聖地に行ったとき、どうしてマノンを止めてくれなかったの!?　あんなの……死んじゃうに決まってるじゃない！」

“玛农都说了撒赫菈是她的朋友！她要去圣地的时候，为什么你没有阻止她！？她可是要去那种……九死一生的地方！”

#「それは──」

“那是——”

#　自分が責められることではない。一方的な物言いに、むかっときたサハラは反発心のまま言い返そうとして、声に詰まる。

自己没什么责任。听着摩耶单方面的责怪，撒赫菈心里不由得生出恼怒。正当她准备就这样出声反驳的时候，声音却噎在了喉咙。

#　目の前にいる幼い少女の瞳から、ぼろぼろと水滴がこぼれていた。

她眼前这位少女的严重，泪水正在一滴滴地落下。

#　マヤが、泣いていた。

摩耶哭了起来。

#「あの子が、いれば……まだッ。あたしはこの世界で、一人きりじゃなかった！　あたしを必要としてくれる子が、残ってたのに!!」

“要是，玛农还在……的话。我在这个世界，就不是孤身一人了！最珍惜我的码农，本来能活下来的！！”

#　サハラは、なにも応えることができなかった。しん、と痛いほどの静寂が戻る。

撒赫菈无言以对。只有让人心痛的宁静在身边蔓延。

#「……この際だから聞いておきたいのだけど」

“……我也想趁现在问问你”

#　しんしんと雪が降る中、サハラは静かに口を開く。

雪花簌簌地落下，撒赫菈平静地开口了。

#「マヤ。あなた、どのくらいだった時のことを覚えているの？」

“摩耶。人灾的时候的记忆，你记得多少？”

#　は記憶が消え去り、元の人格が瓦解することで魂に宿る純粋概念に突き動かされるままに行動するようになった異世界人の総称だ。マヤと『』のふるまいがまるきり異なるように、化している間の意識も記憶もないはずなのだ。

人灾是对于失去记忆，人格分解，仅仅依靠灵魂中的纯粹概念而活动的异世界人的总称。摩耶和『万魔殿』的行事风格完全不一样，人灾化的时候的意识和记忆，她应该是都没有的。

#　だがマヤは少なからず『』の小指であった頃の行動を覚えている節があった。

但是摩耶却记得不少还是『万魔殿』的小指的时候的事情。

#「……ほとんど、ない」

“……基本，没有”

#　もし、『』としての千年の記憶があれば、マヤは間違いなく精神崩壊を引き起こしていた。南にある『』の中は、まさしく地獄だ。魔物の蟲毒のさなかで千年過ごした記憶など、人間が耐えきれるものではない。

如果摩耶还有着身为『万魔殿』的千年来的记忆的话，这些记忆一定会让她精神失常。南方的『雾魔殿』中与地狱无二。与魔物相伴度过千年的那些记忆，不是人类可以承受得住的。

#「ただ、記憶が戻る時に……マノンの記憶も、一緒に入ってきた」

“只是，恢复记忆的时候……玛农的记忆，也一起到了脑海中”

#　サハラは納得する。道理で、だ。

撒赫菈明白了。道理上，也该这样。

#　マヤは千年前の記憶と、マノンが『』と一緒にいた時期の記憶だけを引き継いでいる。

摩耶同时获得了千年前的记忆和玛农与『万魔殿』在一起的时候的记忆

#「そうね。友達だったかどうかはわからないけど、別にマノンのことは嫌いじゃなかったのは、確か」

“这样啊。我不知道怎样才算得上是朋友，但从我不怎么反感她来看或许是吧”

#「じゃあ──」

“那——”

#「でも、マノンを助けようとは思わなかった」

“但是，我从没想过要帮玛农的忙”

#　マノン・リベール。

玛农·利贝尔。

#　日本人を勘違いしたような着物をまとっていた彼女は、自分の人生が壊れていることを自覚していた。壊れ切った自分の人生に他人を巻き込むことにもなかった。

穿着与日本人一样的和服的玛农，早就意识到自己的人生已经没救了。而且还毫不犹豫地把别人也卷入到自己这没救的人生中。

#「あの子は、誰の助けも必要としてなかったから」

“因为玛农，根本不需要别人的什么帮助。”

#　自分の命を惜しいとすら、マノンは思っていなかったはずだ。

珍惜一下自己这种事情，玛农恐怕想都没有想过。

#　なにもかも巻き込んで世界を混沌に突き落としたがっていたはずの彼女が、どうして小指といえども『』を正気に戻すことに命を懸けたのか。サハラにはわからない。

玛农本想着要把这个世界的一切都拖入混沌之中，但为什么她为了哪怕只是小拇指的『万魔殿』能恢复记忆甚至付出生命？撒赫菈也不知道。

#　どちらにせよ、たぶん、マヤとマノンは出会わなくてよかった。

不管怎样，大概，摩耶没有遇到玛农的话就好了。

#　マヤは、あまりに普通の子だ。マノンの破滅願望に付き合えるとは思えない。ほんの少しであれマノンと知り合ったからこそ、よくわかる。

摩耶实在是太普通的一个孩子了。玛农也不能让自己残忍的愿望托付与魔耶身上。正因为自己与玛农有一点交情，撒赫菈也能明白。

#　彼女はマヤではなく『』に傾倒していたのだ。

她为不是摩耶的『万魔殿』而倾倒。

#　サハラはすっかり冷え切ったココアを飲み干す。マグカップの底には溶けきれなかった粉末が液状になって、べったりとこびりついていた。

撒赫菈喝干已经完全变冷的可可。马克杯底还没没有完全溶解的粉末变成了黏腻的液体，粘在杯子里。

#「マヤは、どうして『主』……シラカミ・ハクアに会いに行くの？　まさか、本気で和睦を信じているわけじゃないでしょう」

“摩耶，为什么……要去见『主』白上·白亚？你难道不会真的相信能重归旧好吧”

#「ちがう。どうせ、騙してるに決まってるわ」

“当然不会。反正，都肯定是被骗了”

#「じゃあ、なんで？」

“那，为什么？”

#「あたしは……」

“因为我……”

#　ぎゅっと着物のを握る。マヤにとって縁深い人の遺品だ。寄る辺のない世界で、奇跡のようにつながった縁だ。

摩耶紧紧地抓着衣襟。这是对摩耶来说有深深因缘的人的遗物。在这无依无靠的世界里，奇迹般地相遇的人。

#「……必要と、されたい」

“想要，让人依靠”

#　愛してほしい。褒めてほしい。あなたが必要なのだと、言われたい。

想要被爱。想听到夸奖。想有人对自己说“你是最重要的”。

#　それが、異世界に召喚されて以来、ずっと抱いてきたマヤの千年変わらぬ願いだった。

这就是摩耶被召唤到异世界以来，即使已经过去千年也未曾改变的心愿。

#　マヤはさみしさに追いつかれないように、動き続けるしかなかった。千年前は、自分を必要としていた母親のもとに帰りたかった。だがその母親も、死んでしまったことを知っている。

摩耶所作所为，都只是为了自己不再孤独。千年之前，她想要回去最疼爱自己的母亲身边。但如今，摩耶已经知道了母亲的死讯。

#　さみしさに追いつかれてしまっては、身動きも取れなくなる。

这如影随形的孤独，让摩耶动弹不得。

#　だからマヤがハクアに誘われた時、彼女に会いに行く決意を固めたのは必然だった。

因此，在白亚向摩耶发出邀请的时候，摩耶下定决心要见白亚也是必然的结果。

#「もう、戻れる世界もないから……あたしが、この世界に必要なんだって、ハクアに会うことで、証明してやるの」

“已经，不能回到过去那样了……所以，我要借和白亚见面这件事情，证明我对这个世界并不是可有可无”

#　まだ動けるうちに、自分は必要なんだと認めさせるために。

趁着还能活动的时候，为了让世界认可自己。

#「……そう」

“……这样”

#　サハラは目を泳がせた。

撒赫菈眼神飘忽。

#　こういう時に、なにを言えばいいのか。迷った挙句に、そっと目を伏せてしまう。

这种时候，该说什么才好呢？撒赫菈什么也没说，只好看着地板。

#　彼女は人の心に寄り添うことに、慣れていない。誰かを愛したことがない。口先以外で褒めたこともない。他人を必要としたこともない。サハラの頭に思い浮かぶのは、メノウだったらなにかうまい言葉が出るんだろうな、という現実逃避のような思考だけだった。

撒赫菈并不习惯这种与人心灵相交的事情。也从未爱上过什么人。鼓励也不过停留于口头。更没有什么重要的人。就连现在，撒赫菈脑海中思考的也还是“要是梅诺的话现在会说点什么呢”这种逃避现实的一样的想法。

#　会話の尽きた静寂を埋めるように、二人の間にある溝を埋めるように、しんしんと雪が降り続けた。

兀自地不断飘落的白雪，像是要将这无言的沉默掩埋，又像是要填补两人之间的隔阂。

#

#[Interlude　幕間](file:///C:\Users\%E9%A2%9C%E5%BB%BA%E5%BF%A0\Documents\%E5%B0%8F%E8%AF%B4\%E5%A4%84%E5%88%91%E5%B0%91%E5%A5%B3%E6%97%A5%E6%96%87%E5%8E%9F%E7%89%88\%E5%87%A6%E5%88%91%E5%B0%91%E5%A5%B3%E3%81%AE%E7%94%9F%E3%81%8D%E3%82%8B%E9%81%93%EF%BC%88%E3%83%90%E3%83%BC%E3%82%B8%E3%83%B3%E3%83%AD%E3%83%BC%E3%83%89%EF%BC%89%EF%BC%97\text\part0030.html#toc-009)

#

#どうしてそうなったのかは、知らない。

#　ただ、最後の最後。

#　日本へ帰るための送還計画の是非を予言するため北大陸の中心街にたどり着いた時。

#　ハクアの手刀が、の胸を貫いていた。

#　マヤが目撃したのは、廼乃の肉体からハクアが能力を写している場面だった。純粋概念【白】の能力は、他の異世界人の能力を自分のものにできる。彼女が他者の純粋概念の能力を写す際には精神を漂白しなければならない関係上、【白】によって能力を写された相手は化するという欠点があった。

#「最後に聞きたいんだけど……」

#　廼乃は顔をゆがめながらも、驚いた様子はなかった。自分を傷つけた相手に恨みもなく、むしろこうなったのが当然だと言わんばかりの態度は、もしかしたら自分の運命を見ていたのかもしれない。

#「……君、いつから僕たちをってた？」

#「最初から」

#「ああ、そうかい」

#　ハクアが手を抜くと同時に、廼乃のの星が極光を放つ。どんどん広がる導力光に彼女の体が飲み込まれて、宙に浮く。

#　と化す前兆だ。

#　起こるはずのなかった【星】のに飲まれる直前に、廼乃は一言だけ。

#「まったく……だから、殺しておけって言ったんだ」

#　それだけ言い残すと同時に、彼女の体は瞳が放つ極光に飲み込まれた。

#　光は空へと昇り、上空にある透明の巨大な球体『』へと向かう。

#「これで、【星】は……私の……いいや、僕……ワタシ？　──ううん。ボク、のものだ」

#　能力を写す副作用で混濁していたきも落ち着き、一人称の変遷も統一された。

#　だがハクアが完全に立ち直る前に、異変が起こった。極光となった廼乃を飲み込んだ上空の『星骸』が輝き始めたのだ。上空の球体に緻密な魔導陣が描かれ、巨大な導力の輝きに呼応するように視界の限りが導力光を帯び、地盤ごと『星骸』に吸い寄せられはじめる。

#「これは、【星】の……いや、『星骸』か。ノノめ。仕掛けていたな。自分が犠牲になっても、ボクをここで殺す気か。なにかの、魔導で覆って防ぐか……いや」

#　起動しつつある『星骸』から逸らされたハクアの視線が、事態についていけない摩耶に向けられた。

#「先に【魔】と【器】を確保して、逃げるか。有用な純粋概念は、取り入れていかないと」

#　昨日までの彼女からは信じられないほど、ほの暗い瞳だった。

#　だが摩耶たちをかばうように、巨漢が立ちふさがる。だ。いつもは穏やかな彼が、ハクアをにらみつける。

#「どいてくれないかな？　【龍】の純粋概念には興味がないんだ」

#　ハクアの言葉を龍之介が無視したのを、摩耶はその時に初めて見た。えた彼が純粋概念を発動させ、大きく膨れ上がる。

#　摩耶が目撃したのは、そこまでだ。

#　立ち尽くす摩耶はにあった円柱から伸びた細腕に引っ張りこまれた。人がを抱えるくらいの大きさしかないはずの内部には、ワンルームに相当する空間が広がっていた。自分の影に異界を持っている摩耶は、ここが【器】の純粋概念を持つの異空間だと察する。

#「逃げる。摩耶。一緒。それだけ。廼乃。頼んだ。に」

#　狭くて暗い空間にいる人物が、ぼそぼそと告げる。我堂が、蘭という名前の女性だということを摩耶はその時に初めて知った。

#「ま、待って!?　どういうこと!?　ねえ、なんで!?」

#　話を聞くために目線を合わせようと近づくと、びくっとした我堂が毛布で完全に顔を隠してしまう。一瞬だけ見えた顔の造作は人形のように整っていたのだが、我堂は自分をさらけ出すことなく、毛布の中でぷるぷると怯えて震えている。

#　ただ、悲し気に声を絞り出す。

#「は、ハクア。あれ。もう。ダメ」

#　そうして、命からがら北を脱出したが、逃亡は長く続かなかった。

#　我堂は南に摩耶を置いて、自身は東に向かった。西で龍之介を塩と変えたハクアが追ってきたのだ。摩耶からハクアを引き離すために、誰よりも臆病だった我堂は東に行って──おそらくは、ハクアに純粋概念の能力を取り込まれ、と化した。

#　摩耶は一人になって、初めて気が付いた。

#　自分は、なにも知らなかった。守られていたから、知る必要もないと思っていた。

#　だから摩耶は、なにもできないままだった。

#　この世界で、手に入れたものがなかったから。

#　一人になった摩耶の心を支えるものはなかった。最後にはハクアに純粋概念を写しとられるまでもなく、自分の記憶すら純粋概念に奪われた。

#　摩耶は『』となって、南方諸島を食い尽くした。

#『塩の剣』『星骸』『り』『』。

#　のちに四大と呼ばれる災厄は、そうやって生まれた。